

農林水産大臣賞受賞

博愛の心を基調とした協調性豊かな活力あるむらづくり

はくあい さとうえの
受賞者 **博愛の里 上野**
(沖縄県宮古島市)

■ 地域の沿革と概要

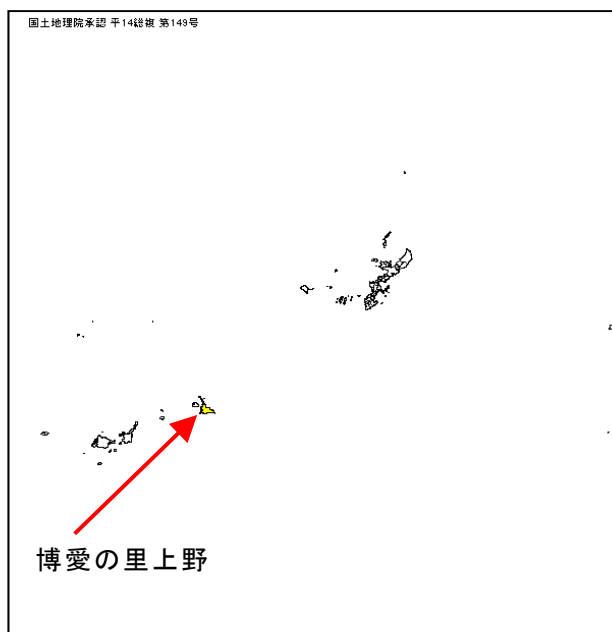
博愛の里上野（宮古島市の旧上野村）は、宮古島の南西部に位置し、航空自衛隊宮古島分屯基地のある野原岳を隔てて旧城辺町に接し、西は旧下地町、北西は旧平良市に接している。地域の南は太平洋に面し、その東部には風光明媚なシギラ浜、西部には住民の誇る博愛精神発祥の地である宮国イナト浜がある。上野地域の面積は宮古群島の8.38%で、宮古島市の旧市町村の中においては最小の規模となる。

旧上野村は、1948年（昭和23年）8月1日に旧下地町から分村したが、平成17年に周辺市町村（平良市、下地町、城辺町、伊良部町及び上野村）が合併し宮古島市となった。

平成27年の農家数は491戸、農業就業人口は631人で、住民の約22%が農業に従事している純農村地域である。

本地域では、農業基盤の整備を精力的に推進し、農業立村を目指したむらづくりを展開してきた。また、宮古島全体で地下ダムを水源とする農業用水を確保し、安定的な農業生産の取り組みにより、さとうきびを中心に、肉用牛や葉たばこ、マンゴーや野菜など園芸作物の栽培が盛んな地域である。特に、園芸品目の生産振興については、他地区から注目されるほど、沖縄県や全国での受賞者が数多く、農業生産技術や品質面でも優れた地域である。

第1図 位置図



第1表 地区の概要（平成27年）

事項	内容
地区の規模	旧市町村単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	37.7% 総世帯数 1,301戸 総農家数 491戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 285戸 1種兼業農家 50戸 2種兼業農家 135戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 1,898ha 耕地面積 827ha 田 - 畑 715ha 樹園地 10ha 牧草地 84ha 耕地率 43.6% 農家一戸当たり耕地面積 1.7ha

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

本地域には、1873年(明治6年)7月11日にドイツ商船ロベルトソン号が上野宮国沖で座礁し、上野の人々が乗組員を救助したことを受け、1876年(明治9年)当時のドイツ皇帝ウイヘルム一世から、宮古島の人々の勇気と博愛精神を讃える記念碑が贈られたという歴史がある。

この博愛精神を広く正しく後世に伝えると共に、国際交流の拠点としてドイツとの友好を深め、末永く交流するため、さらには、観光の振興や地域の活性化に資する目的で、1993年(平成5年)7月12日に「うえのドイツ文化村」が建設されている。

また、2000年(平成12年)に九州沖縄サミットが開催された際、当時のドイツ首相シュレーダー氏が当地を訪れたことにより、国際的にも注目を集めた。その際、同氏が通った宮古空港からうえのドイツ文化村までの道は、シュレーダー通りと称されている。

このような歴史的背景があり、当地域は「博愛の里」として親しまれている。



写真1 1993年に建設されたうえのドイツ文化村

2. むらづくりの基本的特徴

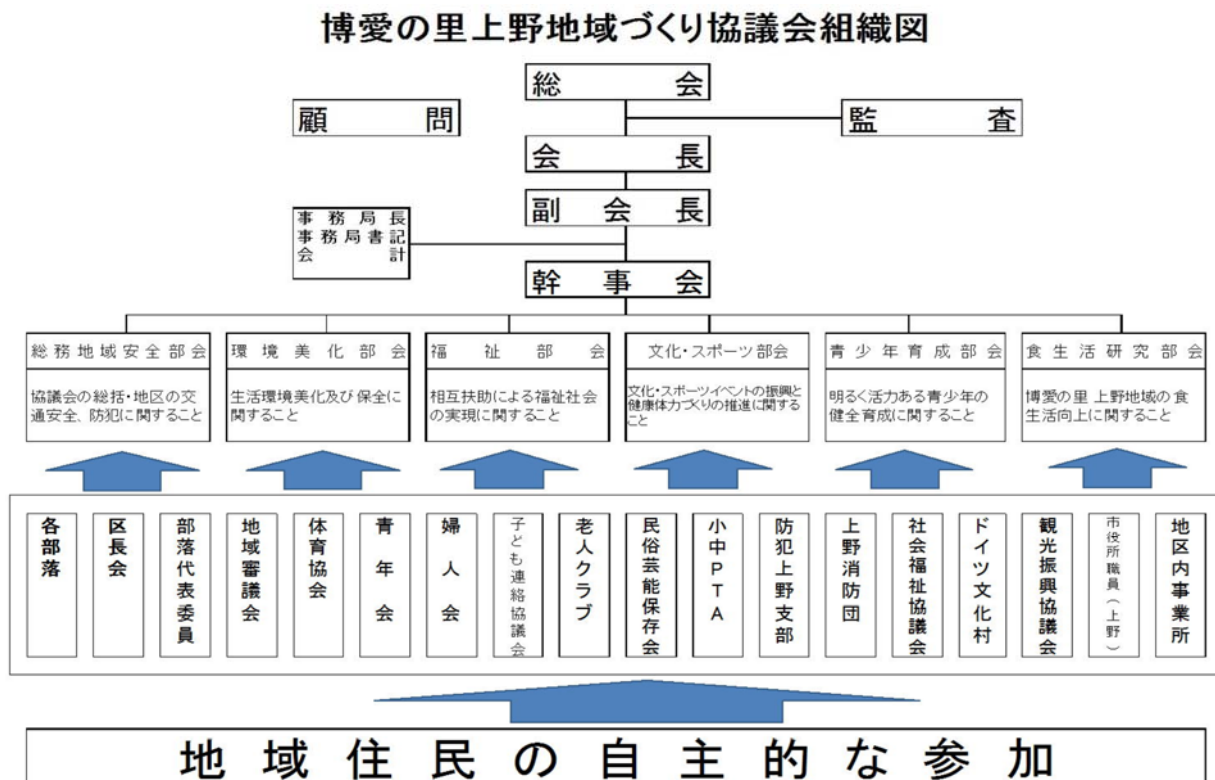
(1) むらづくりの動機、背景

平成17年10月、旧上野村を含む1市3町1村が合併して宮古島市が誕生したが、市町村合併後、上野地域の活動が衰退していると住民の声が多かった。そのため、地域活動を再開して活性化を図ろうと、平成20年5月「博愛の里上野地域づくり協議会」を発足。協議会は、「美しい博愛の心」を基調に、地域住民参加による活動を促進し、住民相互の交流による協調性豊かなコミュニティーづくりと、活力ある住みよい博愛の里上野地域づくりに寄与することを目的に設立された。

(2) むらづくりの推進体制

博愛の里上野地域づくり協議会は、地域住民の自主的な参加を目指しているため、地域で活動する全ての集団を網羅し、その上に6つの部会を設置している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

市町村合併後、上野地域の連帯感、自治意識が希薄となる中、地域活動の活性化を図るため、「博愛の里上野地域づくり協議会」を中心として、青年会、婦人会、子供連絡協議会、老人クラブなどが連携して、平成20年11月より地域住民が集う「博愛の里上野まつり」などを開催している。また、上野地域には独身男性が多いことから、地域の発展と少子高齢化に歯止めをかけることを目的として、博愛の里上野地域づくり協議会主催で、宮古島市内在住の20歳以上の女性を募集して婚活パーティーを開催している。



写真2 上野博愛まつり舞台発表

さらに、旧上野村では、急速に過疎化が進み深刻な社会現象となったことから、他地域に先駆けて村営住宅の建設や博愛ふるさと定住促進奨励金制度を設け、少子高齢化対策に取り組んだ。平成13年度には、離島・過疎化地域振興特別事業を活用し、住宅用地を造成し分譲を行うなど、積極的に定住促進を図ってきた。

このような取り組みが功を奏し、現在の上野地域における人口は下げ止まりの傾向にある。

伝統芸能については、時代の変遷を経ながらも、地域内の悪霊や悪疫を追い払う国の重要無形文化財「サティパロー」や中秋の名月の日に行われる「マストリヤー」、獅子舞、綱引きなど、古くから続く伝統行事が数多く受け継がれ、地域住民の生活に深く根ざしている。

また、芸能保存会が中心となり、棒踊りやクイチャーなど上野地域に古くから伝わる伝統芸能の保存のため、小中学校の運動会や学習発表会などを活用しつつ、地域ぐるみで伝統芸能の指導にも取り組んでいる。



写真3 伝統行事の「サティパロー」

2. 農業生産面における特徴

本地域では農業振興の目標を、「少ない面積で高収益をあげる集約型農業の確立とともに、観光との連携を強化し調和のとれた地域産業づくりの推進」とし、これまでに国営かんがい排水事業により地下ダムの建設による農業用水の確保、基幹作物であるさとうきび生産における機械化作業一貫体の確立、また、耕種と肉用牛との複合経営の確立及び熱帯果樹の生産拡大に向けた生産条件の整備を進めてきた。その結果、平成27年度までの農業生産基盤の整備率は99.4%で、早期からの取り組みにより、他の旧市町村に比較して整備率はかなり高い状況にある。



写真4 スプリンクラーによる散水状況

さとうきびにおいては、担い手育成を通じて安定的な生産体制の確立を図ることを目的として、平成18年に設立した上野地区さとうきび生産組合が、土づくりや栽培技術の向上に尽力しており、平成22年度農林水産祭内閣総理大臣賞受賞農家を輩出するなど、本組合などの活動による生産力向上が図られている。このため、台風の影響を受けながらも生産量は増加しており、平成28年産は前年を2割以上上回る39,592tとなっている。

園芸部門においては、JAおきなわ野菜果樹生産出荷連絡協議会にとうがん、ゴーヤー、オクラ、マンゴーなど8品目の専門部会が設置されている。特にとうがんについては、本地域の出荷量（平成27年産489t）が宮古島市全体の約7割を占めるなど生産が盛んである。また、ゴーヤーについては、出荷量が宮古島市全体の約3割を占め、平均単収が8.9tと同市全体の平均単収

5.9t に比べかなり高くなっている。

とうがん及びゴーヤーについては、定時・定量・定品質の安定生産が認められ、平成 19 年度に沖縄県から拠点産地として認定された県内でも有数の産地で、農業産出額も増加している。

また、上野地域はリーダーとなる人材が多く、宮古島市全体で 40 人いる農業士のうち 10 人が上野地域で活躍しており、特に農業研修生の受入れなど新規就農者の育成にも積極的である。そのため、新規就農者は毎年 10 人程度確保され、青年農業者については年々増加している。

さらに、本地域では女性の社会参画についても積極的で、これまでに 6 人の女性農業士が認定を受け、現在も 4 名の女性農業士が担い手の育成、人・農地プラン検討委員として活躍中である。



写真 5 宮古島市全体の約 7 割の出荷量を占めるとうがん

3. 生活・環境整備面における特徴

博愛の里上野では、7月12日の「博愛の日」を中心に1週間を博愛週間と定め、子供からお年寄りまで参加して、各集落単位で公民館周辺の清掃や空き缶拾いなど集落毎に活動を展開している。また、環境美化部会では公園・道路・観光施設の美化清掃活動や花づくり講習会、庭づくりコンクールなどの開催、博愛の里上野まつりに併せたブーゲンビレアまつりなどを開催している。

また、文化・スポーツ部会では、スポーツ施設や陸上競技場周辺の清掃活動に取り組み、快適な環境でスポーツイベントができるよう努めている。



写真 6 花づくり運動

上野地域農地・水・環境保全管理協定運営委員会では、農用地や農道、沈砂池など農業用施設の点検などを行った後、環境美化部会と連携して、集落毎に農道の路肩や法面の除草作業、沈砂池周りの草刈りや防風林の枝打ちなどを年 3 回実施している。また環境保全に必要な土砂流出防止のためグリーンベルト（植栽）も行うなど、快適な農作業環境の改善に大勢の住民が参加している。

このように、上野地域では、歴史的背景を受け、先人の偉大なる「博愛精神」を讃えながら、「博愛」を理念としたむらづくりが進められている。